

今週のメニュー

■トピックス

- ◇東京大学にて樹脂内窓（エコガラス入り）の断熱・遮熱効果の検証試験開始
－「快適な住まい方」を提案します－

■随想

- ◇古代ヤマトの遠景（61）－【倭の五王問題（2）】－

信越化学工業（株） 木下 清隆

■編集後記

■トピックス

- ◇東京大学にて樹脂内窓（エコガラス入り）の断熱・遮熱効果の検証試験開始
－「快適な住まい方」を提案します－

塩ビ工業・環境協会は、TSCP（東京大学サステナブルキャンパスプロジェクト）で行われた内窓による暖房費削減効果を2009年3月にホームページ（[ユウゾウ先生のよくわかる東京大学リフォームレポート](#)）に掲載しました。その中の東京大学の坂本雄三教授が発表された暖房の消費電力量43%の削減は、大きな成果として、その後の内窓の普及に寄与したと考えています。また、職員の方々へのヒヤリング結果も足元の冷えが緩和されているなど好評でした。今回は、これらを実感された方からの働きかけがあり、別フロアにも内窓を取り付けることになりました。

内窓設置によるビルの省エネ改修は、窓の断熱性能の向上が主たるターゲットであり、その効果は暖房負荷の削減に現れます。ですから、効果検証も寒い時を中心に考えて実施してきました。しかし、暖房負荷の削減だけでは、冷房需要が暖房需要に勝る関東以西のビルにおいて、省エネ手法として不十分であり、震災後は夏にも効果があつて節電手法としても使えるものに期待がよせられています。そのためには、内窓を設置するときに、夏の日射遮蔽（遮熱）もできるような手法を合わせて採用し、冬も夏も大きな効果が期待できる改修方法を探っていくことが、必要だと考えています。

そこで今回は、[エコガラス](#)（AGC旭硝子提供）をいれた内窓（LIXIL提供）とし、冬期は断熱し夏期は日射熱が部屋内にできるだけ入らないように考慮しました。また、内窓と外窓の間に設置されるロールカーテンなどの日よけの効果についても検証する予定です。

検証試験は、TSCPの産学連携研究会に新たに組織する「窓断熱遮熱性能向上タスクフォース」が実施します。

メンバーは、東京大学から、坂本教授および研究室メンバー・TSCP室・施設部、企業側からは、株式会社LIXIL・AGC旭硝子・塩ビ工業・環境協会となります。



東京大学本部棟・内窓設置後

最近は、リフォーム、エコ、いずれのキーワードでも、内窓がすっかりとおなじみになっています。断熱性能や遮熱性能の高いガラスを使用しても、窓枠が熱を素通しするようでは十分な効果は見込めません。この窓枠部材として、塩ビ製品が活躍しています。住宅版エコポイントが復活しましたので、まだ導入されていない方々には、是非とも、設置をご検討いただければと思います。エコポイントの活用が被災地支援にもつながります。(了)

■ 随想

◇古代ヤマトの遠景（61）－【倭の五王問題（2）】－

信越化学工業（株） 木下 清隆

以下に倭の五王に関する記録をもとに、その内容を少し検討してみることにする。

- ① 倭王の宋王朝に対する朝貢は、四二一年に始まり四七八年に終わったらしく、その間の遣使は十回程度だったらしい。この間に、讚・珍・済・興・武の五人の倭王が登場するが、記紀の記録と照合してこれらの五王は、倭国の天皇と一応次のように対応すると考えられている。

讚＝履中又は仁徳、珍＝反正、済＝允恭、興＝安康、武＝雄略

なお、参考のために応神王家の歴代天皇のうち、雄略天皇までを列記すると以下のようになる。

15. 応神天皇、16. 仁徳天皇、17. 履中天皇、18. 反正天皇、19. 允恭天皇
20. 安康天皇、21. 雄略天皇（天皇の頭の数字はその代数）

このような比定は、古代学における多くの一致した見解であることから、ここではこれに従うことにする。

- ② 次に四二一年に倭王讚が初めて宋王朝に朝貢した意味を考えてみよう。先ず、応神天皇の時代は、百済救援のための派兵とその後始末に終始したと考えられるが、とにかく応神の時代は終わった。

それが次の倭王の時代になると、これまでに述べたような、諸々の問題が噴出してきたと考えられる。このような問題の処理に行き詰まった、二代目か三代目とみられる倭王讚は、遂に中国皇帝の権威を利用して活路を見出そうとしたと考えられる。それが四二一年だったということである。讚は、このような事情があったことから、とにかく箔の付く官爵が欲しかったということである。そのためには手ごわい北魏よりも、与し易そうな宋の誕生を俟って遣使を開始したと見られる。恐らく讚の時代に倭国内での戦いが始まり、戦況が好転しなかったために、遂に宋王朝への朝貢を始めたのであろう。



允恭天皇陵

(大阪 藤井寺)

※倭王済は允恭天皇と
考えられている

このときの朝貢で、讚は「安東將軍・倭国王」を宋皇帝から賜っているが、これは、倭国は以後、宋の属国となったことを意味しており、「讚を、安東將軍に任じ、倭国王とする」とのお墨付きをもらったことになる。これは卑弥呼が「親魏倭王」に任ぜられたのと同様の立場に立ったことになる。従って、卑弥呼が、狗奴国との戦いの窮状を魏に知らせると帯方郡から支援の使者が来たようなことが、讚も期待できることになる。しかし、現実には、このようなことはほとんど期待できなかった。当時の宋は南朝の国家であり、魏のように朝鮮半島に出先機関を置いていたような国家とは異なっていたからである。

- ③ 四三八年に倭王珍（反正）が朝貢したとき、倭王としては初めて、使持節、都督倭・百濟・新羅・任那・秦韓・慕韓六国諸軍事、安東大將軍、倭国王と自称したとの記録は注目される。自称したという意味は、このような官爵を賜りたいと願い出たと同じと考えられるが、なぜ倭王珍がいきなりこんな大仰な肩書きを希望したのかは不思議である。しかし、その理由はあったといえよう。それは高句麗と百濟がすでに立派な官爵を東晋から賜っていたからである。高句麗王高璉は四一三年に、
使持節、都督營州諸軍事、征東將軍、高句麗王、樂浪公
を賜り、百濟王餘映は四一六年に、
使持節、都督百濟諸軍事、鎮東將軍、百濟王
を賜っていた。更に四二〇年、東晋の後に宋が建国されると、高祖は、高璉を「征東大將軍」に、餘映を「鎮東大將軍」に進号している。

このような情報を倭国側は任那経由で入手していた。そうであれば、かつての韓一帯に勢力が及んでいると自認している倭国としては、この程度の官爵を賜ってもいいはずだ、と判断したことになる。百濟も新羅もかつては倭国に質を出して来た国ではないか、との自負が自称官爵には溢れている。しかし、結果的には安東將軍・倭国王しか認められなかった。宋にとって北魏の更に北に存在する高句麗は、北魏を牽制する勢力として重要であるとの認識が在ったはずである。百濟はそれに隣接する小国ではあるが、更に高句麗を牽制する国として理解されていたのであろう。しかし、海を隔てた倭国になると、ほとんど理解の及ばない国だったということである。

しかし、なぜ倭王珍がこのような大胆な行動に出たのかは考えておく必要がある。それはこのとき、十三人の臣下の將軍号除正も同時に申請していることと関連している。この宋王朝への朝貢は、倭王珍としては即位して間もない時期のことであり、国政運営に自信が無かったとみることは出来る。だからとにかく大きな官爵を賜る必要があったのである。要するに強く宋の権力に頼ろうとする姿勢である。

他の理由としては、西国の反対勢力との戦いが厳しい状況になっていた可能性がある。それゆえに、倭王珍を支持する十三人の豪族の將軍号除正を申請したのであろう。これは一つのご機嫌取りであるが、そこまでしなくては即位仕立ての倭王には、支持豪族を掌握することが出来無かったのである。この十三人は多くの豪族の中から選ばれたのではなく、この当時、倭王支持を表明し現実に西国制圧に兵を出していた豪族の数が十三だったということである。

同様の将軍号の除正が四五一（元嘉二八年）の倭王済の時代にもなされているが、このときの数は二十三人に増加している。この人数の意味を珍の時代と同様と考えるなら、倭国王を支持する豪族の数が二十三に増えたと解釈することが出来る。このような支持豪族数は少ないようにみえるが、これ以外の豪族達が皆、反倭王家ではなかったと考えれば、特に少ないとはいえない。東国は当時においても倭王を支持していたはずであるし、西国も皆が皆、反対勢力ではなかったと考えられるからである。当面の『反倭国連合軍』との戦いにおいては、四三八年当時では十三豪族で間に合っていたのかもしれない。これ以外に当然東国の諸豪族が含まれていたはずであるが、彼らは倭王家に服属していることから、除正の対象からは外されていたと考えられる。
(つづく)

前回：[「古代ヤマトの遠景」\(60\) - 【倭の五王問題\(1\)\] -](#)
「古代ヤマトの遠景」：[バックナンバー](#)

■ 編集後記

先日初めて鹿児島を訪ねました。

火山灰が降るのも初めて体験しました。桜島ではお墓に屋根がある風景を見かけました。降灰からお墓を守るというのもありますが、お墓も家という考えがあるからだそうです。毎日花を手向け掃除をしているところも多く見られました。

住んでいる家とお墓、二軒ある家を先祖とともに大事に守るのはとても大切なことだと思いました。

今年のメルマガは今号で終わりです。来年は1月19日（木）からスタートします。今後ともよろしくお願いいたします。（リマル）

■ 関連リンク

- [メールマガジンバックナンバー](#)
- [メールマガジン登録](#)
- [メールマガジン解除](#)



◆編集責任者 事務局長 東 幸次

■東京都中央区新川 1-4-1

■TEL 03-3297-5601 ■FAX 03-3297-5783

■URL <http://www.vec.gr.jp> ■E-MAIL info@vec.gr.jp